農村住民の消化器疾患について

Gastroenteric diseases in rural people

京都府立医科大学衛生学教室（主任 額田榮教授）

細 見 義 明

Yoshiaki Hosomi

Department of Hygiene, Kyoto Prefectural School of Medicine

(Director: Prof. A. Nukada)

は し が き

著者はさきに某県下の高校教職員、県庁職員ならびに交通関係従業員について消化器疾患の調査を行い、消化器疾患の症状が職場環境によつて非常に相違することを報告した。以上の対象はいずれも都市の住民であるので、今回は近代の産業とは直接的関係のうすい農村の住民について同様の調査を行つた。

調 査 方 法

対象は 京都府北部海岸にある農村である。調査票は「高校教職員における消化器疾患について」¹⁾に使用したものと、ほぼ同形式のものを使用し、これに昭和34年10月現在の消化器疾患についての自覚症状および既往症を記入せしめた。保健所を通じ配布した調査票は3,000 枚におよんだが、その中2,406 枚が回収できた。しかし集計には前報の被検者の年齢を考慮し、満20才より59才までの男女1,244 名の分のみを用いた。その内訳は農業従

事者は男子 422名女子 497名で、農業に従事しないその他の農村住民は、男子 193名女子 132名である。その他の農村住民とは、農業従事者を除外した住民全部で、商業・工業・給料生活者・自由業・無職が含まれている。

調 査 成 績

1. 自覚症状の発現率

第1表は職種別年齢別有症率である。ここに有症者とは消化器疾患の自覚症状のうち、胃の不調感・胃痛腹痛・腹部膨満・胸やけ・げっぷ・嘔気・酸性嗝気・胸につかえるなどのうち、いずれかの一つでも自覚症状を訴えた者である。総数として有症率は、男子では農業従事者34.1%その他の農村住民37.3%、女子では農業従事者22.5%その他の農村住民15.9%である。男子は女子に比較し自覚症状の訴えが多い。

男女とも有症率には有意の年齢差は認められないが、男子農村住民においては、有意ではないが30才代に高い傾向が認められる。

第 1 表 職種別年齢別有症率

性別 職 種 別 年 齢 別	男 子				女 子			
	農 業 従 事 者		そ の 他 の 農 村 住 民		農 業 従 事 者		そ の 他 の 農 村 住 民	
	調 査 数	有 症 率	調 査 数	有 症 率	調 査 数	有 症 率	調 査 数	有 症 率
20歳代	105	34.3	67	34.3	104	24.0	56	10.7
30歳代	114	38.6	57	49.1	138	21.7	36	22.2
40歳代	86	31.4	42	38.1	133	21.1	24	16.7
50歳代	117	31.6	27	18.5	122	23.8	16	18.8
計	422	34.1	193	37.3	497	22.5	132	15.9
検定結果	$\chi^2=1.610$ n = 3 P>0.2		$\chi^2=6.976$ n = 3 P>0.05		$\chi^2=0.469$ n = 3 P>0.9		$\chi^2=2.229$ n = 3 P>0.5	

第 2 表 自 覚 症 状 発 現 率 (調査人員対%)

自覚症状別	男				子				女				子							
	農 業 従 事 者				その他の農村住民				農 業 従 事 者				その他の農村住民							
	自覚 症状 発現率	20歳 代	30歳 代	40歳 代	50歳 代	自覚 症状 発現率	20歳 代	30歳 代	40歳 代	50歳 代	自覚 症状 発現率	20歳 代	30歳 代	40歳 代	50歳 代	自覚 症状 発現率	20歳 代	30歳 代	40歳 代	50歳 代
胃の不調感	22.0	23.8	26.3	18.6	18.8	28.0	34.3	31.6	21.4	14.8	14.1	17.3	13.0	11.3	15.6	11.4	8.9	16.7	12.5	6.3
胃痛・腹痛	17.8	18.1	21.1	15.1	16.3	21.8	28.4	24.6	14.3	11.1	12.1	17.3	13.0	12.1	6.6	9.1	5.4	8.3	25.0	
腹部膨満	3.1	2.9	3.5	1.2	4.3	4.1	1.5	7.0	7.1		3.2	3.8	2.9	3.0	3.3	3.0	1.8	2.8	4.2	6.3
胸部膨満	14.9	14.3	18.4	15.1	12.0	12.4	4.5	24.6	16.7		5.8	2.9	7.2	6.0	6.6	3.8	3.6	2.8	8.4	
げっぷ	2.1	1.9	0.9	3.5	2.6	2.1	3.0	3.5			1.0		1.4	0.8	1.6	0.8		2.8		
嘔気	0.7	1.0	0.9		0.9	1.6	1.5	1.8	2.4		0.4	1.0	1.4	0.8		1.5	1.8		4.2	
酸性	2.4	1.9	4.4	2.3	0.9	2.1	1.5	1.8	2.4	3.7	1.8	1.0		5.3	1.6	1.5			4.2	6.3
胸につかえる	2.1	1.0	2.6	1.2	3.4	0.5			2.4		1.0			1.5	2.5	1.5		2.8	4.2	
胃痛 み の方	5.7	5.7	9.6	5.8	1.7	5.2	10.4	1.8	2.4	3.7	3.0	3.8	2.2	3.0	3.3	2.3	1.8		8.4	
	1.4	1.9	1.8		1.7	2.1	1.5	9.3			0.8	1.9	0.7	0.8		0.8		2.8		
ころげる位	0.5				1.7	0.5		1.8			0.2	1.0				0.8	1.8			
食事と無関係 食直後 空腹時	2.6	3.8	1.8	4.7	0.9	4.7	4.5	7.0	4.8		1.8	2.9	1.4	2.3	0.8	1.5		2.8	4.2	
	3.8	3.8	6.1	2.3	2.6	1.0		1.8		3.9	2.4	3.8	1.4	2.3	2.5	0.8		2.8		
	5.9	6.7	6.1	2.3	2.8	8.8	13.4	10.5	4.8		2.0	2.9	0.7	3.8	0.8	0.8		2.8		

* 5%以下の危険率で有意の年齢差のあるもの

以上の結果を前報までの他の職業と比較してみると、男子農村住民の有症率は、高校教職員¹⁾、県庁職員²⁾、石油精製工員³⁾と同程度で、交通関係従業員⁴⁾、電機工場の工員⁵⁾より少い。又女子では、バス車掌・高校教職員⁶⁾・県庁職員などよりも有症率は低い傾向が認められる。

第2表は自覚症状の内容の調査結果である。農村住民では男女とも、胃の不調感・胃痛腹痛が自覚症状の過半数をしめ、これらについて胸やけが多く、腹がはる・すつばい水があがる・げつぶ・胸につかえる・はきけ等の訴えは少い。この傾向は前報までの結果と全く同様である。

以上の順位には、年齢性別に関係がなく、 χ^2 検定の結果も有意の差とは認められなかった。

又、胃の痛みの大部分は胃重感で、さしこむ痛み・ころげる位の痛みは少いことも、高校教職員・交通関係従業員の場合と全く同じ傾向である。胆道疾患と密接な関係があると推定される「ころげる位」の激痛は、本調査では農業従事者でも農業以外の職についてる者でも、男子 0.5%女子 0.2~0.8%程度に過ぎない。この値は前報の交通関係従業員の場合とほぼ同率であり、横⁹⁾の東北地方の農村住民についての5%という値にくらべると非常に低い。

胃の痛む時刻としては、男子では空腹時痛が最も多く、女子ではこのような食事時間との関係は認められなかった。男子における以上の結果は、都市における交通関係従業員・石油工員・電機工員の場合と同様である。

要するに農村においては、男子では農業従事者の方が、農業に従事しない者よりも自覚症状の訴えが少いが、女子では農業に従事している者の方が、従事していない者よりも訴えが多い傾向が認められた。

第 3 表 職 種 年 齢 別 有 既 往 率

年 齢 別	性 別 職 種 別	男 子				女 子			
		農 業 従 事 者		その他の農村住民		農 業 従 事 者		その他の農村住民	
		調査数	有既往率	調査数	有既往率	調査数	有既往率	調査数	有既往率
20歳代		105	14.3	67	31.3	104	10.6	56	14.3
30歳代		114	24.6	57	26.3	138	24.6	36	25.0
40歳代		86	38.4	42	23.8	133	16.5	24	33.3
50歳代		117	29.1	27	33.3	122	21.3	16	31.3
計		422	26.1	193	28.5	497	18.7	132	22.7
検定結果		$\chi^2=7.890$ n = 3 P<0.05		$\chi^2=1.162$ n = 3 P>0.7		$\chi^2=8.734$ n = 3 P<0.05		$\chi^2=4.115$ n = 3 P>0.2	

2. 既往に罹患した胃腸疾患について

第3表は職種別年齢別有既往率である。ここに有既往率とは、既往に急性胃炎・慢性胃炎・胃痙攣・十二指腸潰瘍・胃拡張・胃下垂・虫垂炎・肝胆疾患のうち、いずれか一つ以上の疾患に罹患したことのある者の人数を、調査人員に対する百分率としてあらわしたものである。

総数としては男子では、農業従事者26.1%その他28.5%、女子では農業従事者18.7%その他22.7%で、男女を問わず前報までの都市の住民よりも有既往率が低い。とくに農業従事者の有既往率は、高校教職員・交通関係従業員・石油工員に比較すると半分以下であり、都市の住民としては低い県庁職員・電機工員よりも更に低率である。又女子では、農業従事者は前に述べたように、その他の農村住民にくらべ自覚症状の多いにも拘らず、既往症は少い傾向がみられる。

年齢別にみると、男子農業従事者では40才代、女子農業従事者では30才代に有既往率は最も高く、これ以上の年齢ではかえって減少している。 χ^2 検定の結果、この年齢差は5%以下の危険率で有意の相違と認められた。男女とも農業従事者以外では有意の年齢差は認められなかった。

第4表は既往症の内訳である。男子農業従事者では、肝胆疾患（肝炎・黄疸・胆石症・胆のう炎を含む）が最も多く、第2位は胃痙攣、第3位は虫垂炎になっている。女子農業従事者でも、肝胆疾患が最も多く、第2位が虫垂炎、第3位胃痙攣の順になっている。農業従事者以外では男女とも、第1位虫垂炎、第2位肝胆疾患、第3位胃痙攣である。農業従事者は前報の交通関係従業員・高校教職員・石油工員と同様、肝胆疾患が非常に多い。農業従事者以外の男子では、虫垂炎の既往歴が非常に高いが、男子の農業従事者ならびに女子では、前報の

種々の職業にくらべ非常に罹患率が低い。

胃潰瘍の罹患率は、男子では農業従事者 1.9%、農業従事者以外 3.1%であるが、女子では農業従事者では皆無、農業従事者以外では 1.8%である。男女とも農業従事者以外では高く、前報の交通関係従業員・高校教職員に近い罹患率を示しているが、農業従事者は男女とも低率である。

十二指腸潰瘍の罹患率は、男子では農業従事者 1.9%、農業従事者以外では 1.6%、女子では農業従事者 1.9%、農業従事者以外では 1.8%であった。男子では交通関係従業員・高校教職員にくらべ低く、石油工員・電機工員とほぼ同率の値を示しているが、女子では、バス車掌・高校教職員にくらべ高いようである。

疾患別に年齢差を検討してみたが、第4表に示すように、40才代男子の農業従事者にとくに多い肝胆疾患を除いては、5%以下の危険率で有意の年齢差を示している疾病は認められなかった。

3. 既往症の有無と有症率との関係

第5表は既往症の有る者となし者との分け、有症率の程度を調べた結果である。交通関係従業員・高校教職員・県庁職員・石油工員については、既往症のある者ではない者にくらべ、2倍以上の有症率を示しているが、男子農村住民ではその差があまり著明に認められない。これは既往症のない者でも自覚症状の訴えが多いためである。これに反し女子では、前報の高校教職員・県庁職員の場合と同様、既往症のある場合には、ない者にくらべ、ほぼ2倍近くの有症率を示している。

第5表に示すように、有症率の年齢差は若年齢にやや高い傾向が認められるが、有意の差とは認められなかった。

第 4 表 既 往 症 (調査人員対%)

既 往 症 別	性 別		男					女					子				
	職 種 別		農 業 従 事 者					農 業 従 事 者					其 他 の 農 村 住 民				
	年 齢 別		20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	既往症を有する率	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	既往症を有する率	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	既往症を有する率
			有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
急性胃	性	炎	2.6	1.0	2.6	3.5	2.6	2.6	1.5	1.8	4.8	3.7	1.8	1.0	4.3	1.5	1.8
慢性胃	性	炎	1.7	1.8	2.3	2.6	3.1	3.1	4.5	4.8	3.7	0.8	1.0	1.0	1.5	0.8	0.8
慢性胃	性	炎	5.9	2.9	6.1	11.6	4.3	4.1	3.0	5.3	2.4	7.4	4.4	1.0	7.2	3.0	5.7
慢性胃	性	炎	1.9	1.0	3.5	2.6	2.6	3.1	3.0	1.8	2.4	7.4	0.6	0.7	0.8	0.8	1.5
十二指腸潰瘍	性	炎	1.9	1.0	1.8	2.3	2.6	1.6	1.6	1.8	2.4	3.7	2.0	1.9	1.4	2.3	2.5
胃下垂	性	炎	0.9	1.0	2.6	1.7	0.5	1.6	3.5	1.8	11.9	3.7	2.0	1.0	1.4	2.3	4.5
胃下垂	性	炎	2.4	1.0	2.6	4.7	1.7	0.5	1.8	1.8	11.9	3.7	2.0	1.0	1.4	2.3	4.5
虫	性	炎	3.8	2.9	3.5	5.8	3.4	14.0	23.8	15.5	11.9	4.6	4.6	3.8	6.5	4.5	6.1
*肝・胆疾患	性	炎	12.6	6.7	8.8	22.2	14.6	6.7	7.5	7.1	2.4	11.1	6.0	2.0	5.9	7.6	11.3

* 5%以下の危険率で有意の差のあるもの

考 察

以上の結果を総合すると、農村住民では消化器症状の訴えが、都市の住民にくらべると少いと云い得る。消化器症状の訴えは精神身体医学的には、精神的身体的ストレス⁷⁻¹¹⁾に大いに関係があるとすれば、ストレスの発生要因が少い農村では、都市にくらべ消化器症状の訴えも少いのでは当然であろう。

社会学的見地から農村と都市とを比較してみると、第Iには、農村は都市にくらべ社会生活に対する不安感と焦燥感が少い。

Nels Anderson¹²⁾の云うように農村は都市にくらべ刺激が少く、対人関係も深く永続的で、伝統慣例に縛られることが多い。又農村では血縁関係の結合が多く、その交際は深く永続性があり、都市ほど孤立感は少い。

農村では、職業身分の変化ならびに居住の変動が少く、都市にみられるような上昇沈黙作用もはるかに小さい。農業に従事している限り、生活に対する安定感は都市にくらべて強い。之に反し都市では、オートメ化に伴い、生産力が一層に高度の知的水準を要請する。そして結果として、知能の低いものはしりぞけられる。このような労働適応¹³⁾の問題は、単純筋肉労働者ほど深刻であり、将来の失業に対する絶えざる不安感を持ち、焦燥にかられるこのような単純労働者は、都市における労働力の大部分を占めているのである。

第2には農村は都市にくらべ欲求不満が少い。

農村における労働は、都市にくらべ前時代の労働である。近代的産業における労働にくらべると、肉体的にも時間的にも過重労働である。近代産業では、経営と労働の分離ならびに労働の分業化・細分化が行われるが、農村ではこのようなことがない。そのため農村における労働は、意欲的・自主的であり、労働の熟達と合理化そのものが、自己の生産性を高め、その生活意欲を満足させることに役立っている。

このように都市労働者では、科学的技術の発達により心理的葛藤が多く、これが Stressor としての比重を益々大きくさせている。都市と農村における消化器疾患の罹患率の相違は、おそらくその根底においては、このような両者間の社会的環境の相違にもとづくものである。

結 論

京都府下某農村住民男子 615名女子 629名について、消化器疾患に関する自覚症状および既往症を調査し、次

第 5 表 既往症の有無と有症率との関係

性別	年 齢 種 別	%	既往症を有する者の有症率		既往症のない者の有症率	
			農 業	そ の 他	農 業	そ の 他
男	20 歳 代		60.0	42.9	31.1	30.4
	30 歳 代		53.6	66.7	33.7	42.9
	40 歳 代		30.3	30.0	32.1	40.6
	50 歳 代		38.2	22.2	28.9	16.7
	計		42.7	43.6	31.4	34.8
女	20 歳 代		36.4	37.5	22.6	6.3
	30 歳 代		32.4	33.3	18.3	18.5
	40 歳 代		40.9	25.0	17.1	12.5
	50 歳 代		30.8	20.0	21.9	18.2
	計		34.4	30.0	19.8	11.8
検定結果			$\chi^2=5.507$ n=3 P>0.1	$\chi^2=3.667$ n=3 P>0.3	$\chi^2=0.477$ n=3 P>0.9	$\chi^2=4.009$ n=3 P>0.3
検定結果			$\chi^2=0.596$ n=3 P>0.8	$\chi^2=0.006$ n=3 P>0.99	$\chi^2=1.386$ n=3 P>0.7	$\chi^2=1.526$ n=3 P>0.5

の結果を得た。

1) 他の職場に比べ、農村住民の自覚症状の訴えは少く、とくに女子は男子に比較し少い。自覚症状の過半数は、胃の不調感・胃痛腹痛で、この傾向は他の職場と全く同様である。胃痛は大部分胃重感に近く、とくに男子農村住民では空腹時痛が多い。

2) 既往症についても他の職場に比べ少く、農業従事者では最も少い。農業従事者では他の職場と同様肝胆疾患が多いが、虫垂炎の罹患率は低い。又男子農村住民の胃・十二指腸潰瘍の罹患率は低い、女子農村住民では高い傾向にある。

3) 男子農村住民では、他の職場に比較し既往症のない者でも自覚症状の訴えが多い傾向が認められるが、女子では他の職場と同様、既往症のない者の有症率は低い。

4) 農村住民の消化器症状の訴えが少いのは、他の職場に比較し、精神的身体的ストレスによる消化器疾患を誘発し難いからである。

稿を終るに当り御指導御校閲を賜った額田繁教授に深謝すると共に、資料の蒐集に御協力下さった京都府網野保健所菊池昭子所長ならびに同職員の方々に厚く御礼申

上げます。なお本論文の要旨は第30回日本衛生学会総会において発表した。

参 考 文 献

- 1) 細見：日本衛生学雑誌，14，2，98-105，1959.
- 2) 細見・中島・小口：日本衛生学雑誌，15，5，1960.
- 3) 額田・山口：第32回日本産業医学会にて発表，日本衛生学雑誌掲載予定.
- 4) 組見：日本衛生学雑誌，15，1，1960.
- 5) 佐藤：労災，第8巻第3号，p. 40-47.
- 6) 楨：日本医事新報，No.1738，6-10，1957.
- 7) 松本・加藤：サイコ・ソマティックス，115-131，1957.
- 8) Weiss and English：Psychosomatic Medicine，254-306，1957.
- 9) 田多井：精神身体医学講座，第1巻，心と身体上，217-249.
- 10) 小坂：精神身体医学講座，第3巻，病気と心上，203-220.
- 11) Harold, G. Wulff：Stress and Diseases p. 36-52，1957.
- 12) 磯村：都市社会学，11，19，44，昭和30.
- 13) 暉峻：精神身体医学講座，第1巻，心と身体上，p. 265-291.

(受付：1960年6月25日)